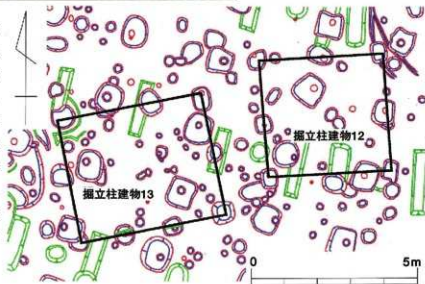


掘立柱建物は18棟見つかっていますが、先にも記したように、ほとんどが大型建物と重複するもので、『ムラの時代』のものです。建物のほとんどの平面プランはまだ検討途中で明確になっておらず、ここで紹介するには至りませんでした。ただ検出時において、その柱穴の形や大きさから、平面プランが明瞭だった2棟の掘立柱建物について説明します。これらの建物は大型建物3と重複する位置にあります。



この2つの建物は、柱穴の形状や柱間隔、方位等から古墳時代後期の集落に伴う建物とするのが妥当でしょう。しかし可能性として大型建物以前の時期、瓦窯が構築され、操業を開始した初期段階の施設なのかもしれません。そう考える理由は、柱穴の形状が大型建物に酷似することからです。



住居址の間を縫うように、かつて水が流れていた痕跡がありました。埋土からは、弥生時代中期の遺物と古墳時代後期の遺物が出土しました。2つの「ムラ」の時代を通じてここを水が流れていたようです。そして「工房の時代」に、おそらく完全に埋められたものと思われます。流路の底に2箇所の大きな穴を見つけました。中には多くの土器や炭の堆積が見られました。弥生の「ムラ」の貯水施設ではないかと思われます。



貯水穴1

住居址11の南東に、位置する穴です。検出した際の直径1.5m、深さ1.2mほどでしたが、本来の最大径は、およそ3m、深さも2mほどになるだろうと思われます。埋土中から大量の弥生土器が出土しました。



貯水穴2

住居址7の北東で検出された穴で、直径は3m、深さ1.8mです。弥生土器を大量に含むのに加え、炭化物の堆積層も認められました。



貯水穴2
土器出土状況



貯水穴2の掘削が底近くにまで及んだ頃、1つのはほとんど完形の弥生時代中期の編頸壺が出土しました。この壺を取上げてみると、下側になっていた胴部の下半に長径10cmほどの楕円形の穴が穿たれていました。祭りなどで土器を奉げるとき、穴をあけておく例は古代ではよく見られます。この土器もおそらくこの穴を埋める際に、水の神にささげられたものだと思います。

4,おわりに



大型建物2の内部を想像して見ました。わかりやすいように屋根や壁などの一部を省略しています。身舎の部分が倉庫、庇の部分が作業場になっています。建物の構造を含め、本当にこのようだったかはわかりません。

今回の西田中遺跡発掘調査は、藤原宮の造瓦工房を確認したことが最大の成果だと思います。しかし、この遺構の重要性は、今後、古代の造瓦に関する研究や本格的な都城制を導入した藤原宮の造営事業に関する研究の基礎資料となり得ることから、より高くなることでしょう。これまで個々の遺構について説明してきましたが、最後にこれまでの説明では触れなかった、大型建物群についての推測や問題点をまとめておきたいと思います。

まず、大型建物群の出現ですが、瓦生産の当初からは存在しなかったように思われます。それは掘立柱建物12と13の存在、この概報ではこの2つの建物だけ説明しましたが、方位を磁北にとる建物は、これら以外にも掘立柱建物6・7・8・9・11などがあり、柱穴掘形は12・13に比べかなり小さいながら方形のものです。いずれの建物も、大型建物と重複し、大型建物より古いものです。年代の確定ができず、古墳時代後期の集落に伴う建物の可能性が非常に高いのですが、初期の工房の施設とする可能性も捨てきれません。もうひとつ、その理由として上げられるのは、大型建物1南側で検出した粘土採掘坑の存在です。このように深い穴を建物の非常に近くに掘るとは考えにくく、初期段階に掘られた穴を埋めた後に建物が建てられたと見るべきかと思えます。いずれも積極的な根拠とはなりませんが。

大型建物群の施設としての性格は、一言でいうと作業所兼倉庫と考えています。そう考える理由は、すべての建物の周囲に同じような白い溝が存在することからです。これは、5つの建物と同じように利用されていたことを意味します。大型建物1には、粘土を捏ねた穴があり、大型建物2北側の溝もこのような施設だろうと先に述べましたが、ほかの建物ではごく浅い溝が見ついているだけです。しかし、これらの浅い溝も同様の施設だったと思われます。なぜその大きさに違いが生じたのかは、建物の建てられた時間差によるものと考えます。建物の建てられた順番については、その平面プランや配置から大型建物1→大型建物2→大型建物4・3→5の順になることを推定しましたが、建物が増えることによって、粘土を捏ねる施設の規模が、小さくて済むようになったと考えられるからです。これは、建物の数が増えることで、個々の建物において、作業する工人の数が減ったことを意味するのではないのでしょうか。

また、大型建物1の穴や大型建物2の溝は、粘土を貯蔵していたと考えられますが、建物が増えたことによって粘土の貯蔵は、建物内で行うようになったのかもしれませんが、冬場の凍結を防ぐためにも、そのようにした可能性は高いと思います。

最後に非常に大胆な推測なのですが、大型建物群は本当に藤原宮造営のために作られた施設だったのでしょうか。平城宮遷都の際、多数の藤原宮の瓦が輸送されたようですが、平城宮造営の初期段階において西田中の瓦窯群が再利用され、その工房が新たに大型建物群として再建された可能性はないのでしょうか。

以上記したことは、これからの遺物整理作業等において明らかになる部分もあろうかと思いますが、現時点での調査担当者の思いつきを述べておきます。

参考文献

- 京谷康信「奈良時代窯跡調査概報」『考古学雑誌』21-11 日本考古学会 1931年
大脇潔「黒瓦の製作地」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所 1978年
山川均「内山瓦窯1号窯発掘調査概報」大和郡山市教育委員会 1995年
山川均「内山瓦窯第4次発掘調査概報」大和郡山市教育委員会 1996年
服部伊久男「郡山の古墳」『矢田丘陵周辺の古墳文化』大和郡山市教育委員会 1998年
中井一夫・泉武「慈光院裏山遺跡調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1977年度 奈良県教育委員会 1978年
今尾文昭「小泉遺跡発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報』1989年度 第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所 1990年
服部伊久男「西田中遺跡 第1・2次発掘調査概要報告」大和郡山市教育委員会 1985年
西本安秀・増田真木「七尾瓦窯跡(工房跡)」吹田市教育委員会 1999年
増田真木「吉志部瓦窯跡(工房跡)」吹田市教育委員会 1998年
石井清司ほか「京都府遺跡調査報告書」第15冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
森郁夫「東大寺の瓦工」臨川書店 1994年



調査期間中、郡山西中学校の体験学習として、ふたりの生徒さんに調査を手伝っていただきました。

報告書抄録

ふりがな	にしたなかいせき							
書名	西田中遺跡							
副書名	藤原宮造瓦所の調査							
巻次								
シリーズ名	大和郡山市文化財調査概要							
シリーズ番号	40							
編著者名	濱口芳郎							
編集機関	大和郡山市教育委員会							
所在地	〒639-1007 奈良県大和郡山市南郡山町554-1分庁舎TEL(0743)53-1151							
発行年月日	2000年6月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
にしたなかいせき 西田中遺跡	ならけんやまこおりやまし 奈良県大和郡山市 しんまちちない 新町地内	29203	-	34度 38分 6秒	135度 45分 32秒	19970916～ 19971030 19980820～ 19990630 19990701～ 20000531	3215	市営住宅 建設工事 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西田中遺跡	瓦工房 集落	弥生中期 古墳後期 白鳳後期	掘立柱建物 17棟 堅穴住居 20棟 その他 貯水壇、土壇、自然流路、溝など 大型掘立柱建物 5棟 掘立柱建物 1棟 その他 溝、粘土採掘場 など	弥生土器、石器、土師器、須恵器、瓦				

大和郡山市文化財調査概要40

西田中遺跡

藤原宮造瓦所の調査

平成12年6月30日発行

編集・発行 大和郡山市教育委員会

奈良県大和郡山市南郡山町554-1分庁舎

印刷 PR美術印刷株式会社

